

年輪年代学的手法による 参河三嶋贄荷札の検討

1 緒 言

年輪年代学では、年代測定手法であるクロスデーティングにより同一材由来の推定もおこなうことができる。この手法を、通常の年輪年代測定では対象としない年輪数の少ない小型の木製品に導入する契機となったのは、平城京跡において一括で出土した斎串群を対象とした同一材の検討といえる¹⁾。この成果を受けて、同様の試みを木簡についても広範に実施することを進めており、一定の成果をあげつつある²⁾。本稿では、参河三嶋贄荷札を対象として、同一材の推定を中心とした年輪年代学的な検討を試みた成果を紹介する。

2 検討の経緯

愛知県の佐久島、篠島、日間賀島は、三河湾に浮かぶ島々で、古代には、析嶋、篠嶋、比莫嶋とみえる（以下、参河三嶋と総称する）。奈良時代前半頃の参河国播豆郡の贄は、この三嶋に属する海部が、月ごとにサメやスズキ、タイなどの楚割を貢進する形式で納められており、関係する荷札は、断片も含めて120点ほどが知られている。

これらの荷札は、諸国の調庸や贄の荷札と比べて、次のような顕著な特徴をもつ。国郡里（郷）ではなく三嶋の海部を貢納主体とすること、個人名はほとんど現れないこと、一点の例外を除き貢納した年を記さないこと、である。さらに、かねてから奇数月は篠嶋、偶数月は析嶋による貢進というシステマティックな傾向が指摘されており³⁾、参河三嶋の贄の荷札は、贄研究を進める上でもっとも重要な資料群として位置付けられてきた。

筆者の一人山本は、愛知県・静岡県関係の古代木簡を集成する作業を進めるなかで⁴⁾、これらの木簡を再検討する機会を得た。そこでは、年を記さない木簡の年代を数年に絞り込めるものや、きわめて特殊な事例ではあるが、天平18年正月（746）に特定できるものがあることをあきらかにした⁵⁾。かかる問題関心から関係する木簡をあらためて眺めてみると、材の特徴が酷似するものも散見し、同一材の木簡が含まれている可能性を指摘した。そこで、年輪年代学的な検討を試みることにした。



図97 分析対象木簡（赤外線画像） 1：2

3 年輪年代学的検討

平城宮・京から出土した参河三嶋贄荷札の中から、年輪数がより多く刻まれていると考えられる柁目材の木簡67点を抽出し、分析・検討を実施した。年輪幅の計測は、分析対象を接写撮影し、Cybis社製年輪計測ソフトウェアCooRecorderを用いておこなった。クロスデーティングは、SCIEM社製年輪分析ソフトウェアPASTを用い、年輪曲線をプロットしたグラフの目視評価と統計評価⁶⁾をあわせておこなった。

クロスデーティングにより、年輪幅の前年に対する増減のみならず絶対値も酷似し、同一材に由来すると考えられる組が複数見出された。ここでは、そのうちA・BおよびC・Dの2つの組合せについて紹介する（図97）。樹種⁷⁾および『平城木簡概報』での番号は、A：ヒノキ属・城22-21上（189）、B：ヒノキ属・城22-21上（191）、C：スギ・城19-20下（175）、D：スギ・城19-21上（176）である。

A・Bは、Aの年輪がBの6層目から26層重複する関係で照合する（図98）。またC・Dは、Dの年輪がCの

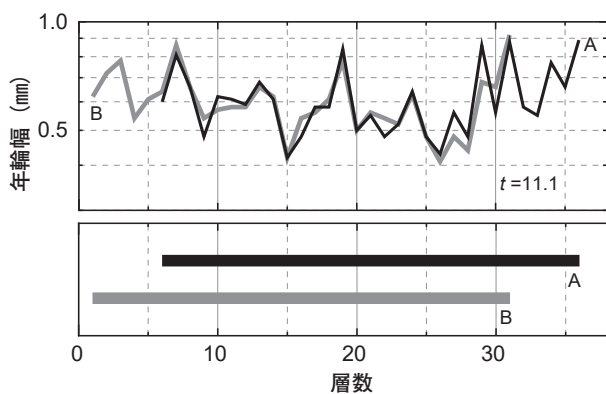


図98 A・Bの年輪曲線(上)とバーチャート(下)

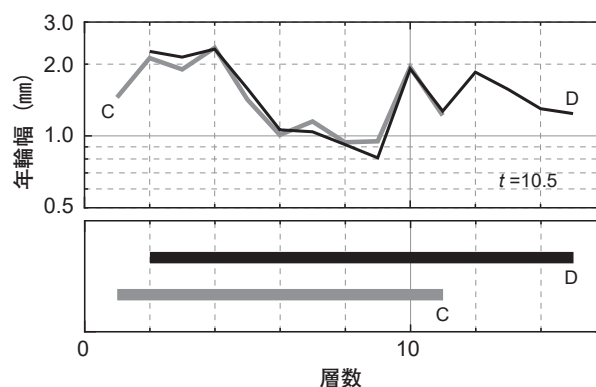


図99 C・Dの年輪曲線(上)とバーチャート(下)

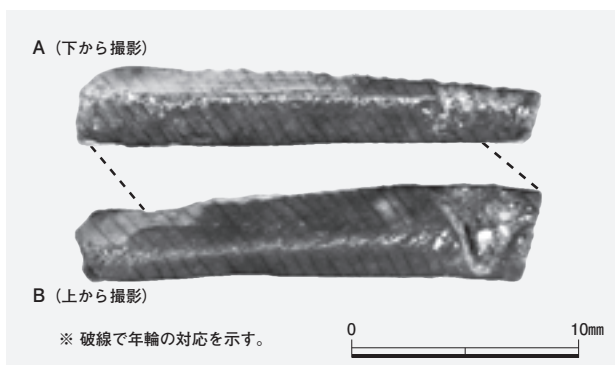


図100 A・Bの木口面(下が文字面)

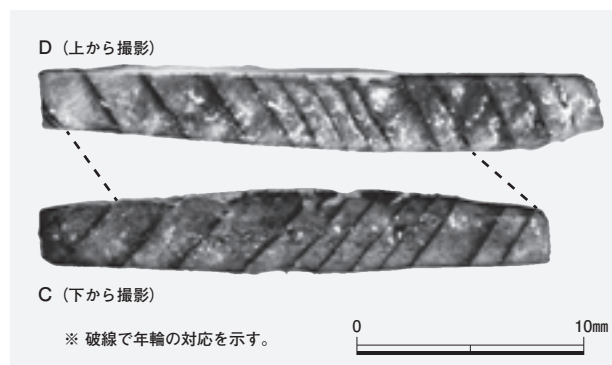


図101 C・Dの木口面(下が文字面)

2層目から10層重複する関係で照合する(図99)。このように、A・BおよびC・Dは、それぞれ左右に数層ずつとも、含まれる年輪がほぼ重複している。そのため、横方向の位置関係を特定することができ、上下方向に繋がる、もしくは重なり合う、といういずれかとなる。またA～Dは、木取りがいずれも追柁となっているため(図100、101)、それぞれの向きの特定もできる。すなわち、A・Bは文字面を揃えて文字の上下を逆にした関係、C・Dは文字の上下を揃えて表裏を逆にした関係となる。なお、年輪年代学的にあきらかとなったそれぞれの関係を基に接合を試みたが、いずれも直接的な接合関係は認められなかった。

4 本検討の意義

A・BおよびC・Dは、それぞれ同一遺構から出土した木簡であり、それぞれ記載内容も類似している。A・Bは、平城京左京三条二坊八坪二条大路濠状遺構(南)SD5100出土で、「参河国播豆郡析嶋海部供奉四月料御贄佐米楚割六斤」と同文である。また、C・Dは、平城宮内裏東方東大溝SD2700出土である。Cの「参河国芳園郡比莫嶋海部供奉九月料御贄佐米六斤」に対し、Dは「参河国芳園郡□〔比カ〕莫□」に留まるものの、比莫嶋の記載がなされていた贄荷札である可能性が高い。このように、出土遺構、記載内容が一致する参河三嶋贄荷札に、同一材と考えられる組が年輪年代学的に見出されたこと

は、それぞれ組となる贄荷札が製作された同時性の高さを示すものと考えられる。

なお本研究は、JSPS科研費JP17H02424の成果の一部である。
(星野 安治・山本 崇)

註

- 1) 浦蓉子・星野安治「祭祀遺構出土斎串の年輪年代学的手法を用いた接合検討」『紀要 2016』。浦・星野「年輪年代学的手法を用いた古代木製祭祀具の研究」『考古学雑誌』101(2)、2019。
- 2) 山本祥隆・星野「年輪年代学的手法による平城京跡出土木簡の検討」『紀要 2017』。星野・桑田訓也・山本祥隆・浦「年輪年代学的手法による平城京跡出土木簡の検討 2」『紀要 2018』。星野・浦・山本祥隆「年輪年代学的手法による木簡研究の可能性」『木簡研究』40、2018。
- 3) 関連する研究は枚挙に暇がないが、別して、今泉隆雄「貢進物付札の諸問題」1978(『古代木簡の研究』吉川弘文館、1998)、樋口知志「二条大路木簡」と古代の食料品貢進制度『木簡研究』13、1991、渡辺晃宏「贄貢進と御食国」『文化財論叢Ⅳ』奈文研学報92、2012をあげる。
- 4) 山本崇・藤間温子(共編)『愛知県・静岡県関係古代木簡集成(稿)』(東海の地方官衙と木簡－伊場木簡の再評価を中心に、木簡学会静岡特別研究集会資料集第2分冊)、2018。
- 5) 山本崇「参河三嶋贄荷札の年代」(投稿中)。
- 6) Baillie, M.G.L. and Pilcher, J.R. "A simple cross-dating program for tree-ring research" Tree-Ring Bulletin 33, 1973. クロスデーティングの統計評価がスチューデントの t 値で示される。
- 7) 柁目面を生物顕微鏡で観察するとともに、木口面・板目面を実体顕微鏡で観察することにより同定した。